

## 「第30回 ACNフォーラム」開催

マダイ等の感染症対策を再確認、諾智サーモン養殖視察報告も

10月29日、NPO法人アクアカルチャーネットワーク主催による「第30回 ACNフォーラム」(日本の水産増養殖を考える会)が福岡市内で開催され、各地の種苗生産・養殖業従事者、試験研究者、資機材供給業者など約100名が参加した。3題の講演と総合討論などが4時間にわたり展開され、その後の懇親会でも様々な情報交換がなされた。翌30日には、国内最大級のクロレラ培養施設を有する、クロレラ工業(株)九州筑後工場の見学会も行われた。

冒頭挨拶したACNの田嶋猛理事長は、「これからの日本の養殖業には、地域振興に即しながら国民に魚を供給する役割と、飛躍する輸出産業としての役割の両面が期待されている」とし、今回の講演テーマの選定でもそれを意識した旨を述べた。すなわち、生産現場を悩ませ続ける各種感染症についての最新情報と、輸出産業としての先行例であるノルウェーおよびチリのサーモン養殖の現地情報である。

そしてまずは、「ブリ・マダイ・ヒラメ等の養殖に見られる主要な感染症」と題して、水産研究・教育機構 増養殖研究所の坂井貴光主任研究員が講演。ブリ類のノカルジア症、ピブリオ病、レンサ球菌症、べこ病、溶血性黄疸、マダイのイリドウイルス病とエドワジエラ症、ヒラメのエドワジエラ症、アクアレオウイルス感染症および滑走細菌症について、それぞれの症状や予防・治療策の現状と課題などを解説した。

次いで、鹿児島大学水産学部の横山佐一郎助教が登壇。「ノルウェーのサーモン養殖場視察レポート～製品コンセプトを支える技術～」として、昨年秋に訪れたノルウェー南西部のサーモン種苗生産場、海面養殖場、加工場、資材メーカーなどでの見聞を報告。漁場の一角にあるフィードバージ(洋上サイロ)に飼料メーカーの配送船がEP飼料を補充していく様子や、船内で過酸化水素によるサケジラミ駆除も行う大型活魚船などを、画像とともに紹介した。飼養管理についても省人化が進んでいる中で、早く大きく育てたスタッフの方が高収入になる“インセンティブ”も設けられているという。

第3講演は、太平洋貿易(株)の安藤洋次取締役によ

る「世界のサーモン養殖・加工～機械化の進んだチリを例に～」。3年前に訪問したチリ第10州の養殖場と加工場の画像を示しながら、貿易相手としての日本とチリとの関係、対象種や業界構造におけるチリとノ

ルウェーの違いなどを説いた。業界構造の違いとしては、例えばチリでは養殖から加工までの一貫生産の企業が多いのに対し、ノルウェーの大手は、自社養殖分に加えて中小生産者の魚も買い取って加工・輸出する場合が少なくない印象だという。安藤氏はさらに、今年8月に参加したノルウェーの養殖展示会「AQUA NOR 2019」の様相も紹介した。

各講演後の質疑応答および総合討論では、魚病対策とサーモン養殖の現状評価が主な論点となった。

感染症に関しては、ミズカビおよび滑走細菌に有効な薬浴剤の確保、スクーチカ症、マダイのべこ病などに悩まされている現場があり、それらの有効策は未開発のようだった。

サーモン養殖については、ノルウェーのそれは成功事例として取り上げられる機会が多いものの、現場はサケジラミに大いに悩まされていることが改めて報告され、「かつて掲げていた目標の2/3の生産規模にとどまっており、伸びしろとされる陸上での閉鎖循環式養殖も実生産はさほど上がっていない」との指摘も。日本でのサーモン養殖に関しては、その現場に通じている参加者から、「ニジマスを日本の海で育ててもギンザケのようには大きくならない。生産性の面からはギンザケの方が有利」との認識も示された。

(池田)



田嶋 猛 ACN理事長



坂井貴光氏(増養殖研究所)



横山佐一郎氏(鹿児島大学)



安藤洋次氏(太平洋貿易)